

拙堂會報

第9号

2020年12月1日発行

発行所
齋藤拙堂顕彰会理事長 飯田 俊司
津市一身田豊野1406-197

齋藤拙堂とは何者か 齋藤正和 1
日本の拙堂へ出発の歳 加藤龍宗 2
(津での人生十五年の始まり)
「自助、共助、公助」 飯田俊司 3
飯田理事長津市文化功労賞を受賞 4
藩校有造館建学の流れ—その四—
天下の文藩 中川植二 4

理事就任・挨拶 田矢修介 5
理事就任・挨拶 村主英明 5
拙堂入門 三芳公子 6
令和二年度下期の行事予定 6
会員一覧・役員一覧 7

齋藤拙堂とは何者か

顧問 齋藤 正和



くのかという問題について、今ほど揺らいでいる時代もないと思うからだ。ここにおいて、天保元年(一八三〇)拙堂が三十四歳のとき発表したデビュー作『拙堂文話』の第二章の文頭に掲げられている。

「文章の盛衰は國家の運に関わる」

という、簡潔な表現ではあるが、一筋縄ではないフレースが思い出される。「言語文學こそは一国文化の核心だ」という宣言といえるからだ。

さらに拙堂は天保一四年(一八四三)四十七歳のとき、『海防五策』を脱稿している。この著は阿片戦争(一八四〇)に刺激を受けて書かれ、その当時、問題意識を共有する知識人の間で大いに読まれた。その第五策にある興味深い

一文を取り上げてみる。

「愚(私)ひそかに國家のため、深思長慮し、以て長久の策を求むるに、我の、虜(外敵)におけるは、ただに武をもってこれを持たず(對抗せず)而してまた、まさに文をもってこれを防ぐべし」とある。

『海防五策』の骨子はこうだ。拙堂は、西洋列強が世界中で繰り広げている植民地拡大の動きを把握したうえで、露・欧・米の歴史、国土の状況を研究し、なぜ彼らが荒波を超えてまでそのような野望を実行するに至ったかを述べる。すなわちその当時にして既に、地理・歴史・文化・民族を統合した学問である「地政学」的な考察を行っているのだ。拙堂は、我が国の状況を考察した上で、國家を防衛するには、武力だけではなく、文、即ち武力によらない全てのもの、思想文化・精神・道徳・宗教・学問・教養などが極めて重要であることを述べている。前述の『文話』で「文章の盛衰は國家の運に関わる」と述べた一連の思考の流れから言えば、国防問題には、武力による防衛だけに止まらず、そ

「拙堂とは何者か」。単純ではあるが、奥深いこの問いかけをすることにより、私自身の精神のよりどころを見いだそうとしたのは、今から三〇年以上前のこと。拙堂の業績を研究する会に触発されたことだった。しかし、昨今、これらのことが私自身の私的な話に限らないと気づき始めた。近年グローバル化の進展の下、日本人としての精神の依りどころをどこにどう置

の底辺にある思いや考え方の総体を見極め、守るべきものは何か、恃むべきものは何か、その戦略を練ることこそが非常に重要なのだと訴えているのである。

日本は、二〇〇〇年以上の歴史を誇る国でありながら、幕藩体制崩壊を境に明治以降、今日までたった一五五年ほどの間に全く違う国ではないかと思われるような変容を遂げた。今あるのは、経済の拡大に伴う凄まじい我欲の衝突と、果てしない効率化、そして統制である。それらの総体である一国文化の変化は当然である。誰も逃げ場が無い。否応なく追従を強いられ、選択の余地すら見い出せない。

そもそも本来独自の文化文明とは、長い年月をかけてそれぞれの国と民族が培ってきた豊かな精神的土壌といつてよい。古代から継続した我が国固有の文化文明は、明らかに江戸末期までは存在した。一介の武士でありながら「天下国家とはどうあるべきか」をその生涯に亘って深い洞察力と幅広い知性をもとに探求し続けた拙堂の人とその業績を研究し「拙堂とは何者か」を知る事は、取り組むに値するのではないかと思うのである。



日本の拙堂へ出発の歳

（津での人生四十五年の始まり）

会長 加藤 龍宗



世の中はコロナコロナと憂えしも

拙堂仲間負けずに行こう 龍宗

令和二年も終わろうとしている、我国にしても、世界にとってもコロナに明けコロナに暮れた年となった、では拙堂が来津した二百年の昔はどうであつたろう、外にはロシアやイギリス等が度々来たり通商を求めた、即ち西欧勢力の圧迫を受け、開国への道を求められたのであつた、内にあつては全国的に飢饉がつづき各地で一揆が起つた、一八〇四年出羽大地震によって松島と並ぶ名勝地象潟湾が崩れ、一八一六年幾内、東海道が大風により壊滅的な被害を受け、諸国にコレラが流行し、人心の不安は極度に達した、自然災害に見舞われ、疫病に侵される激

動の時代であつた、なんと今日とよく似ていないか、そんな昏迷の中、青年拙堂は未知の地津に来ることとなり教育者として、日本の拙堂としての始まりの年となった。藩命により派遣され、藩校の教授となり、藩主の侍続（教育係）に専念しつつも京都への遊学を重ね、歴史の地、名勝を訪ね、当時の代表的な文人達との交流により、学者文人としての地位を不動にしていた。そんな拙堂は来津して八年目の一八二八年侍続として隔年ごとに半歳間江戸に出仕することとなった、やっと津に安住し始めた時のことである、江戸への未練と津を第二の故郷として生きてゆこうとの決意の詩を紹介しよう。

七里の渡しを過ぐ 齋藤拙堂

家を携えて西に去り 九たびの秋に逢う
日夜 郷を思い 志 始めて酬わる
行きて渡る桑溟 却って回顧すれば
勢州 今日 是れ 并州

一家をあげ伊勢に来てから九年たった、日夜江戸を思っていたがやっと酬われた、七里の渡しを過ぎ、ふり返って見ると伊勢の国は、故郷のように思われる。中唐の詩人賈島(かとう)が気のりしないまま十年住んだ并州(山西省太原市)に別れを告げ、桑乾河(そうかんか)を渡り遠い地に向うとき、その町に対するなつかしさと名残惜しさがこみあげ、

「自助、共助、公助」

理事長 飯田 俊司



新型コロナウイルス感染の拡大が収まらない。それどころか、冬の到来とともに第三次の感染拡大により各地で感染が増加している。

人類の三大脅威は疫病、戦争、飢饉と言われるが、今まさに疫病の脅威に晒されている。

医療技術や公衆衛生が進歩しても未知の病原

并州が故郷のように慕わしいと詠んだ「桑乾河を渡る」の詩を踏まえ伊勢は第二の故郷であると吟じた。江戸っ子から伊勢の拙堂へ、否日本の拙堂への出発の年であった、拙堂に乾杯!! 会員の皆様のご健勝をお祈り申し上げます、良いお歳を。

体による疫病の脅威からは逃れられない。

三つのうち戦争だけ原因が人間にあり、努力さえすれば脅威を回避できる。

第二次世界大戦後七十五年間、局地的な紛争はあったものの大きな戦争はなかった。

しかしながら民族、宗教、イデオロギーなどの相違による戦争の種は尽きない。次の大戦は人類の滅亡と覚悟し、人類は戦争回避の努力を続ける必要がある。

飢饉の脅威はどうか。飢饉は旱魃、冷害、台風、洪水などから農産物の凶作を招き、人々が飢え苦しむ現象である。自然災害の多い日本はこれまで幾度か飢饉に苦しんできた。特に江戸時代の大飢饉では、被害の大きかった東北では餓死者が一〇万人前後と推計され、全国では一〇〇万人とも言われる。

齋藤拙堂は飢饉が数十年周期で発生すると見抜き、具体的な飢饉対策を「救荒事宣」で、また米の備蓄対策として「三倉私議」を著し、「常

平倉」(公儀による米価安定策)、「社倉」(農民による米の備蓄)、「義倉」(富者が金を出して米を備蓄)、という三種の備蓄倉庫制度の必要性を説き、藩内を飢餓から救った。まさに江戸時代版「自助、共助、公助」の考え方と言える。

現在日本は農業技術の向上、グローバルな食料のサプライチェーンの構築などにより、飢饉の脅威は感じられない。しかしコロナウイルス感染症の世界的蔓延で、備蓄不足のマスク、アルコール消毒薬などの感染症対策用品の輸入が困難になり、人々が購入に苦労した。

食料のサプライチェーンの構築で安心していたら、輸出国が自国で必要な食料の禁輸措置、或いは輸出制限に走れば、たちまち豊かな食生活も不可能になる。拙堂が飢饉に際してはお金を持っていたても売ってもらえないから、米で備蓄すべきと説いた「三倉私議」の教訓を思い出す。

日本の令和元年度の食料自給率は三十八%にすぎない。本当に欲しい時に欲しいだけの食料を手に入れることができるのか、自給率の向上(自助)、一層の国際協力(共助)などグローバルな「自助、共助、公助」の努力が必要である。



祝 飯田理事長 津市文化功労賞を受賞

社会・文化・スポーツ団体の理事長を数多く務めその振興に活躍

飯田理事長は令和二年十一月十八日、令和二年度津市文化功労賞を受賞されました。

この賞は津市の文化振興に寄与し、その業績が顕著であった団体または個人に与えられるものです。

飯田理事長は株式会社百五銀行会長そして相談役を務められ、退職後は多年にわたり公益財団法人石水博物館理事長など数多くの団体の要職に就かれております。特に三重県を代表する三重フィルハーモニー交響楽団の代表として、その育成・発展に尽力され中部地方屈指の市民オーケストラに成長させました。齋藤拙堂顕彰会の理事長として、郷土の偉人齋藤拙堂の顕彰事業に力を注がれるなど、津市の文化振興に長年貢献されておりますことが評価されました。

現在の文化活動

齋藤拙堂顕彰会 理事長
津観音保存会 会長
三重県立津高等学校同窓会 会長
三重フィルハーモニー 名誉会長
公益財団法人岡三加藤文化振興財団 評議員

藩校有造館建学の流れ―その四

中興の祖 督学齋藤拙堂

天下の文藩

顧問 中川 禎二



前号で述べたように、拙堂先生のご思想は朱子学を根本としています。しかし藩校教育方針の古学を中心とした折衷主義に敢えて反対せず自説に固執していません。学問は経世の実用に共さなければと折衷する立場をとっています。従って人柄は器の大きい判断力の鋭い大儒でありました。

さて、第二代督学石川竹厓時代の有造館の校運は衰退してしまいました。その実情は当時の関係書物に具体的に指摘されていますが、時習館等教室への出席率が悪く士気の衰退を嘆じております。

このような校運衰退も拙堂が督学に任じられるや立派な運営手腕で、学校を充実発展させま

した。拙堂の人柄とその学問の広さが学校を魅力的にし、就学の気風を一挙に高めたのです。時あたかも黒船来航で全国的に緊張し、藩の空気も改まり学問と武術の訓練に励むようになってきました。

拙堂は状況判断から積極的に洋学を導入し、また洋式軍事訓練を始めました。洋学館、演武荘を建てたのです。人材育成に力を入れ、江戸や長崎へ留学生を送りました。また文武教育の一環として多くの図書を出版し、特に資治通鑑は大部の書物で十八人の人員で十二年かけて校正が進められ、有造館版としてかなりの部数が幕府をはじめ全国に納められております。これに伴い学校図書館を拡充し、従来からの漢学にも一層注力しました。また武術の流派はそれぞれ各藩の秘密だったのですが、国防のため、他流試合も奨励しました。大砲の製造や試射にも学校は大きく貢献しました。種痘館も全国に先駆けて学校に設け種痘の普及に努めました。庶民の学校「修文館」ができたのも拙堂の力によるところが大きいです。そして文武を充実した名声は他藩にも聞こえ、諸藩から留学生が派遣される程になりました。



「有造館記」蔵版印

こうして督学齋藤拙堂は衰退した有造館の面目を一新し、津藩は天下の文藩と言われるようになりました。

まさしく齋藤拙堂は有造館の中興の祖であったのです。

続きはまた次号で

理事就任ご挨拶

理事 田矢 修介

この度は皆様の温かいご推挙により新理事として迎えて頂き誠に有難うございます。

あらためまして齋藤拙堂顕彰会の皆様方のためゆまね文化振興と伝統継承へのご尽力に深甚なる敬意を抱いております。

難駁な自己紹介を恐縮ながら、私は平成十一年の初当選来、津市吟剣詩舞道連盟会長種田真山先生の流派で詩歌吟詠を愛する会員の皆様と共に詩吟を学んでまいりました。

今私たちの社会は狩猟社会・農耕社会、工業社会、情報社会に次ぐソサエティ5.0と謳われる新たな社会へ移行されつつありますが、他方で自然や歴史への畏敬の念といったこれまで私たちが大切に慈しみ培ってきた伝統文化が失われるのではないかと憂慮されます。

先賢が残された素晴らしい伝統文化を次の世

代へと紡いでいくことは漢詩を愛する私自身の大切な責務であることを胸に、これからも顕彰会の皆様と心を合わせ活動させて頂けますことを光栄に思っております。

津市の誇りである偉大な漢学者齋藤拙堂先生の顕彰活動を通じ、津市の更なる文化振興や魅力向上につながる取り組みとなりますことを希求し、大所高所からのご指導ご鞭撻を何卒よろしくお願い申し上げます。

理事 村主 英明

昨年、入会させて頂いた村主英明(すぐり・ひであき)と申します。津市議会議員をしている関係で僭越ながら「津市広報」担当の理事を仰せつかりました。

建築を学び、都市計画や住宅などに関する仕

事をしてきた関係で、「歴史を生かしたまちづくり」は私にとっても大きなテーマです。今住んでいる一身田の寺内町は、高田本山を含め素晴らしい魅力があり、その活性化に何かお役に立ちたいと思っています。また、趣味の尺八を通じて、伝統音楽を大切にしていきたいことも大事だと感じています。

長い歴史の中で育まれ、愛されてきた建物や街、また、そこで活躍した偉人たち、文化・芸術・技能は貴重な地域資源であり、新しくどんなに叡智と資金を注ぎ込んでも、その価値を超えることはできない私たちの大切な宝物です。それらを現在・未来のために有効に活用してふるさとの魅力づくりを進めていきたいいつも考えていますが、現実には、その価値が正當に評価されず、大切にされず、生かされていないことが多いのが残念です。

本会の活動に参加させて頂くことを通じて、皆さまからいろんなことを学ばせて頂けることをとても嬉しく思っております。どうぞよろしくお願いいたします。



拙堂入門

短歌選者 三芳 公子

旧家の友の家に、齋藤拙堂の筆になる扁額がある、拙堂については、有造館の督学だったことぐらいしか知識のなかった私は、拙堂の筆跡を見て急に身近に感じたものである。

このたび、拙堂會報の短歌欄の選者をおおせつかり、津藩の賢人であった拙堂の資料を沢山頂き、その業績を勉強させて頂いた。

わけでも、「月瀬記勝」、梅溪遊記に魅入られ時を忘れて何度も読み返した。

月ヶ瀬の美をこのように歌い上げた拙堂の詩どころに打たれる。詩句の美しさ、景を詠んだ壮大さ。「雪は白を以て勝り梅は艶を以て勝りし」「大地皆白雲は梅溪の全真を得たる」月瀬記勝を読んだ文人がこぞって月瀬に遊行したことにもなるかなと思った。

この偉大なる学者拙堂のもとに学んだ藩の若者たちの幸せを思う。良き師を得ることは人生最大の喜びだろう。

久しぶりに有造館の入徳門を訪ねた、静かな城跡の中に昔の姿を髣髴とさせて建っていた。松落葉が薄く屋根に積っている、この門をくぐって、幾人の若者が志をとげたらうか。

抜けるような秋空に向って、入徳門の朱の扉は大きく開いていた。

令和二年度下期の行事予定

齋藤拙堂顕彰

第五回「俳句・短歌」の募集

十月一日発行の津市広報と、十月十一日付で事務局から会員の皆様にお知らせしたように第五回・齋藤拙堂顕彰「俳句・短歌」を募集しました。

応募期限は、令和二年十月一日（令和二年十月十日（木））まで。

応募方法

○官制はがき一枚に五作品。自作で未発表の物に限ります。

○俳句・短歌いずれも一人五作品以内とします。

○選者が添削する場合があります。

第5回 齋藤拙堂顕彰「俳句・短歌」募集

テーマ
齋藤拙堂・齋藤拙堂を取り巻く人々
有造館
津の風景と歴史を含む自由題

募集期間
令和2年10月1日（木曜日）
～令和2年12月10日（木曜日）

応募方法
官制はがき一枚に5作品。自作で未発表の物に限ります。
俳句・短歌いずれも一人5作品以内とします。
選者が添削する場合があります。
住所、氏名、年齢、電話番号、郵便番号を明記の上出品して下さい。

選考発表
応募された作品のうち、優秀作品に津市長賞、津市議会議員賞、津市教育委員会教育長賞及び顕彰拙堂顕彰会会長賞が贈られ、令和3年3月21日（日）第5回顕彰拙堂顕彰吟道大会で表彰します。

主催：齋藤拙堂顕彰会 後援：津市・津市教育委員会

〒514-1136 津市戸木町 2883 TEL. 059-255-2515

○住所・氏名・年齢・電話番号・郵便番号を明記。
俳句・短歌担当 山崎満世理事
(059)255-2515

優秀作品は令和三年三月二十一日（日）の第五回齋藤拙堂顕彰吟道大会で表彰し吟詠されます。

賞は津市長賞・津市議会議員賞・津市教育長賞・齋藤拙堂顕彰会会長賞の四賞です。選者は、俳句は山崎満世理事、短歌は三芳公子で、それぞれ津市発行「津市民文化」の俳句・短歌欄の選を担当しておられます。

齋藤拙堂顕彰

『第四回小中学生書道展』

令和三年三月十二日（金）から三月十四日（日）まで、津リージョンプラザ三階の生活文化情報センター（展示室）で、齋藤拙堂を顕彰する県下の小中学生書道展を開催します。

展示時間は午前九時三十分から午後四時三十分。最終日は午後二時。

応募要項

対象 小学生・中学生の毛筆作品



第4回 齋藤拙堂顕彰 小中学生書道展

作品募集

令和3年
3月12日(金)～3月14日(日)

会期
午前9時30分～午後4時30分 入場無料
最終日は午後2時まで

会場
津リージョンプラザ3階
生活文化情報センター(展示室)
津市西丸之内23-1

募集要項

- 対象 津市及び津市を中心とした近隣市町の小中学生。
作品は毛筆作品
- 作品の大きさ ハツ切り(縦67.5cm×横17.5cm)縦形式のみ
- 課題 小1＝刷し、小2＝みどり、小3＝せつどう、小4＝入徳門、小5＝有造館、小6＝拙堂文話、中学生＝月瀬記勝、小学生は楷書、中学生は楷書又は行書、一人一点
- 名前の書き方 原則として小学1、2年生はひらがな、3年生以上は漢字で書くのが望ましいが特に限定はない。中学生の行書作品は名前の行書で書くこと。学年の書き方は、(題詞)～作三、又は一年～六年、中学生も一年～三年のどちらでもよい。
- その他 作品の返却は原則として入賞者のみとさせていただきますのでご了承ください。

募集期間 令和2年12月1日(火)～令和3年1月16日(土) 厳守

お問い合わせ：齋藤拙堂顕彰会 書道展委員会事務局 電話 7514-0055 津市河辺町3047-14 西059-224-3670
主催：齋藤拙堂顕彰会 共催：津市 後援：津市教育委員会、中日新聞社 協賛：名古屋キョー和

作品の大きさ＝ハツ切り・縦形式のみ
課題＝小一・おしろ 小二・みどり
小三・せつどう 小四・入徳門
小五・有造館 小六・拙堂文話
中学生・月瀬記勝
書体＝小学生は楷書
中学生は楷書または行書
一人一点
名前の書き方＝小学一、二年はひらがな
三年以上は漢字。
学年の書き方＝小一～中三、又は一年～六年、
中学生も一年～三年のどちらでもよい。
行書作品は名前も行書
応募期間は、令和二年十二月一日(火)から
令和三年一月十六日(土)
優秀な作品には津市長賞・津市議会議長賞・津
市教育長賞・齋藤拙堂顕彰会会長賞等が贈られ、
その表彰は令和三年三月十四日(日)に行われます。

書道展担当 稲垣武嗣理事

(059)224-3670

齋藤拙堂顕彰吟道大会

令和三年三月二十一日(日)、津市吟剣詩舞道
連盟主催・津市共催・齋藤拙堂顕彰会後援の第
五回齋藤拙堂顕彰吟道大会が開催されます。

なお、当日「齋藤拙堂顕彰・俳句・短歌」の
表彰式を行い、優秀作品が吟じられます。

入場は無料。ご来場を歓迎します

日時 令和三年三月二十一日(日)

午前十一時三十分から四時三十分

場所 津市大門七十五

津センターパレス二階

中央公民館ホール

会員一覧

令和二年
十二月十七日現在

● 団体会員 (順不同・敬称略)

株式会社百五総合研究所

伊藤印刷株式会社

二松学舎大学松苓会三重県支部朋友会

株式会社百五銀行

公益社団法人日本吟道学院水心会

三重交通株式会社

百五リース株式会社

公益社団法人日本詩吟学院津岳風会

岡三証券株式会社津支店

株式会社ZTV

百五証券株式会社

株式会社刀根菓子館

錦水流淡翠吟詠会

水洋流詩吟朗詠会

株式会社百五カード

藤貴流扇和会三重県本部

ミフジ株式会社

比佐豆知神社

社会福祉法人三鈴会さくら保育園

株式会社ヘルシーファミリ

井村屋グループ株式会社

株式会社ぜにやH・C

株式会社ヘリテッジホームデザイン

株式会社辻工務店

三重トヨペット株式会社

一般財団法人三重県環境保全事業団

三重県高等学校国語教育研究会

● 個人会員
（順不同・敬称略）

● 個人会員 (順不同・敬称略)

赤塚 聰	赤塚 敬一	赤塚 奉裕	赤野 多恵	浅田 剛夫	阿部みどり	荒川 猛	飯田 俊司	飯田 俊英	飯田 泰之	池上 悦美	池川 誠一	石野 孝廣	板谷ツヤ子	伊藤 英次	伊藤 歳恭	伊藤 武治	伊藤 鑠造	稲垣 武嗣	稲葉 邦成	井上 明美	井ノ口輔胖	岩崎 克彦					
上島 正明	内田 観成	梅田 安春	浦出 雅人	海老原初夫	大井 和人	大森 芳二	岡 重夫	小川 直紀	奥田 榮子	奥田 則子	栢原 良	勝眞 千代	葛山 丕	加藤 栄	加藤 恒二	加藤 龍宗	金児 玲子	川合 俊平	川西みどり	河村ツタ子	神田 奉真	木崎 真陽					
喜田 恭子	北畠 久子	木下 昇	紀平 奉剣	紀平 嘉信	草深久美子	楠 久子	雲井 敬	雲井 純	栗真 恵光	向坂 和也	粉川 孝英	國分 昭男	児玉 進	小林 貴虎	齋藤 正晃	齋藤 正和	齋藤 正人	酒井 宏明	坂部 竜也	佐々木とし子	澤口 真理	下野坊順恵					
菅野 克也	杉浦 雅和	村主 英明	世古 浩	高岡 弘典	高沖 芳寿	高倉ふじ子	高山 尚	瀧川 茜	竹内 雅明	竹村 観扇	辰巳 清和	田中康一郎	田中 幸子	田中 智之	田中 秀人	田邊 礼子	谷川原信雄	谷口 定男	種田 啓子	種田 真山	田矢 修介	近澤 太輔	塚澤 正	塚澤 洋	柘植 信子	辻 保彦	林 當
津村 観耀	寺尾 正紀	寺田 観啓	富田 陽子	豊田 龍倭	内藤 華博	内藤 奉悠	中川 禎二	中川 弘文	長嶋紀美子	中島 伸子	中津 忠夫	中西ひろみ	中根 利彦	中野 清	中村 昭子	中村 美知子	長合 教実	西岡 慶子	西川 幾子	西田きみ子	野崎 耕治	長谷 茂	長谷川和秀	畠山 彦和	林 朝子	林 信吾	
林 竹生	林 忠男	林口 朋一	葉山 俊郎	久岡 克美	人見 一晴	福 正直	藤井 奉修	藤貴 静扇	淵脇 實博	本田三千子	増田 廸子	増田 幸恵	松井 幸子	松村 勝順	水谷 観瑶	水谷 忠文	水谷 千春	見並 勤子	村木 正二	村田 修	村田 文男	森岡 三和	森永 昌雄	森永 千寿	森永 敏江	林 信吾	

役員一覧

会長	加藤 龍宗
理事長	飯田 俊司
常務理事	安村 久仁男
理事	伊藤 誠司
理事	小川 直紀
理事	澤口 真理
理事	高岡 弘典
理事	田矢 修介
理事	藤貴 静扇
理事	山崎 満世
理事	國分 昭男
理事	前葉 泰幸
理事	齋藤 正和
顧問	中川 禎二
顧問	伊藤 歳恭
顧問	米田 豊山
顧問	水谷 忠文
顧問	林 朝子
顧問	種田 真山
顧問	村主 英明
顧問	小林 貴虎
顧問	稲垣 武嗣

安村 久仁男	吉田 壽	高田 峰昭
柳川 隆一	吉輪 康一	谷 伸司
柳谷 剛	米田 豊山	中村 誠
築田 和郎	米田 嬌山	深見 龍舟
山上 和美	若林 宏幸	細谷 正吉
山口 くみ	渡辺 義彦	小林 一成
山家 泉	芳野 貴典	小林 彰
山崎 満計	青木 美樹	古海 玲子
山中 利之	三芳 公子	市川 忠男
山本 三千代	岩脇 久美子	石澤 敏夫
樋田 由美		